

2007年6月15日

# 人間と通信の要点

JOMON あかでみい 山田 学C

arigatou@image.ocn.ne.jp

## インターネットの今後

人間と通信における創造性に関し、今注目すべき企業として、グーグルがある。表面的には検索エンジンの雄として著名である。(文献 10、11、12、13) 同社の創業は 1998 年であり、創業者はともに 1973 年生れの若い 2 名 (ページと布林) である。2 名は「スケーラブル・アーキテクチャ」という根本理論の専門家である。2 名が活動し始めた当時は、「何の役に立つかわからないほど根本的な理論 ...」と軽視されていた理論の専門家である。しかし、世界的にインターネット上の情報がどうしようもなくばらばらになっていき、株式市場においてもインターネット関連企業が暴落した底から、まさにコンピュータの本質に帰り、最高品質最低費用の情報集積システム (ハードとソフト) を柔軟に手づくり的に構築し始めて事態を打開したのが、このグーグルである。グーグルに結集した若い創業者・社員らは、数学や SF 映画の愛好家といったタイプが多く、人間社会における哲学伝統・政治伝統を踏えて情報を集積するという発想が弱いようであるが、人間的な情報集積を軽視している分、コンピュータという機械の本質が良く観えており、コンピュータの可能性をうまく早く追求している雄であると言える。

一方、筆者 (1956 年生れ) は人間社会における哲学伝統・政治伝統を踏えて情報を集積していきたいというタイプであり、筆者らの超長期的な努力がグーグルを代表とする Web2.0 と呼ばれる潮流と結びつく将来において、とてもおもしろい現象が発生するのでないかと、ひそかに期待している。

とくに若い人たちの多くは Web2.0 の潮流のケータイ・検索・メール・ブログ・仲間・広告・音楽・イラスト・写真・動画・オークション・ゲーム・激白などの現在進行形と近未来の可能性がおもしろくてし方がないのかもしれないが、筆者らの関心はまず、本という物体の保存と流通、および電子出版への可能性にある。哲学伝統・政治伝統を踏える思考にとり、何と云っても、本という物体と文字言語という表現こそがもっとも大切であるからである。グーグルがコンピュータの本質に帰ったならば、筆者らは人間の本質に帰りたい。

電子出版に関して言えば、インターネットにつながっている世界中の任意のところへ版下データを送る技術はすでにある。技術的課題は、1 冊あるいは少数部の印刷・製本の品質をどこまで上げられるか、コストをどこまで下げられ

るか、である。家庭や事務所における印刷・製本がどのように発達するか、あるいはまた、地域のコンビニ・宅配便センター・郵便局・書店などにおける印刷・製本サービスがどのように発達するか。重く読み込む本でなく、軽く読み流す本ならば、印刷・製本するまでもなく、モバイルやパソコンの画面を視て読むときに眼や神経が疲れない（理想を言えば日光へ接近する）電磁波・フォント・レイアウト・カラーコーディネート・段落分けなどがほしい。要するに、画面用データあるいは版下データの通信か、少部数印刷・製本技術を介し、本という物体の地域的運輸か。これからの提案・通信・運輸・建築の社会的再編において、通信か運輸かのお客さま満足および費用対効果である。今の本の装幀・カバー・帯などのデザインは書店の棚などにおける広告競争を前提としている。電子出版の発達により、実用本位に飾りがとれていく傾向があるのかもしれない。広告機能は画面上において十分に可能であり、商品本体と分離可能である。しかし一方、重い軽いというより、大切に抱きしめていたい(?)小説など、とくに日本の消費者は、紙の品質・形状や印刷の品質においてとても繊細な欲求があるようである…。印刷・製本は健康平和な祈りとしての版下づくり、そして他者への願いとしての複製づくりであろうか。

以上を踏え、情報集積という観点から言えば、健康平和学として本の読み方・買い方を指導できる書店（ホームページと地域店舗）こそがほしい。

なお、「広告はアートか？サイエンスか？」と自問自答する広告の専門家に筆者はお目にかかったことがあるが、広告に関しては、健康平和教育としての販売促進 ないし 健康平和芸術としての販売促進 という視点が重要になってくるのではないだろうか。

著名なりナックスというOS（＝機械制御記号集）やグーグルやアマゾン（電子書店）などの動きに象徴されるが、自分にとり根本的に大切な内容（プログラムやアイデアやデータベース）をあえて公開してしまい、世界中の愛好家の自発的な内容構築への参加（＝思考と労働の寄付）を期待するオープンソース現象がある。それでいて混乱なく成長していけるビジネスモデルである。市場における新しい現象であり、民主主義の進化であるとも言える。いわば 根本公開民主主義 であろうか。

また、インターネットの発達により、公的放送と私的通信の相互浸透が進む と言われている。そして日本社会の伝統は、エリート層が中国文化やドイツ文化やアメリカ文化などを輸入することにより統一が成立してきた日本社会の伝統は、タテマエとホンネの社会である。日本におけるインターネットの発達により、タテマエ発言とホンネ発言の相互浸透が進む のであろう。象徴的に言えば、官庁のホームページ画面とホンネ(?)を書き散したブログ画面を容易に対比できるのが、パソコン画面というものである。

さらに根本的な問題。インターネット以前において、無名個人が世界に対して発言できる通信技術はなかった。今あるインターネットの暗黒面は、無名個人が世界に対して発言する際の健康平和な規律が存在していないことの証明である。人間社会がこういう通信技術を知ってしまった以上は、それを忘れ否定することはもはや不可能であり、無名個人が世界に対して発言する際の健康平和な規律というものをとにかく時間をかけて確立していくしかない。健康な欲求とは何か。自身の体内を快くするとともに人間社会ないし生物系ないし地球表面にも好影響をあたえる発言・表現・表情とはどういうものか。それを中国の儒教の用語を採り IT 礼楽<sup>れいがく</sup> とでも言おうか。筆者はインターネットをある意味においてイエス・キリストの深い平等思想（善人も悪人も平等）の技術化ではないかと考えているが、いよいよ、人間社会はほんものの 民衆の時代へ入りつつある、ということであろう。

これから必要なのは、世界全人民に現実論としての 健康平和学と保健 を提供する通信・運輸・建築と通貨 IT 制度なのである。

## 深い論理

世界の物理的進化・生理的進化・認識伝統における流転模様（らせん・黄金比・五角形的）と結晶模様（六角形的・四角形的・三角形的）に注目したい筆者らの立場としては情報の流転と結晶を反映するパソコン画面などがほしい。そういう OS のヒューマン・インターフェースがほしい。物理・生理・認識<sup>り</sup>の理から認識・情報・記録を介してコンピュータ・ハードウェアや通信施設やロボットなどへのなめらかな変換ルートである。対象 認識 表現をなめらかにすることである。

たとえば日本文化において「雪月花」とか「花鳥風月」とか言うが、雪の美しさ・月の美しさ・花の美しさ・鳥の美しさ・風の美しさなどを理解する自然と人間の認識構造論・生理的構造論・物理的構造論を深めていきたいものである。そしてそれが日本民族としての環境問題への出発点であると想う。（文献 20 p163 ~ 9「表象の論理」参照）

日本民族は縄文・弥生時代という原点に帰るとともにむしろその古い文化を活す方向において今の計測・制御・通信・運輸技術を活用し園芸と茶室のような美しい農業と食物流通を創造する。これが生活環境問題の要点であろう。（文献 25 24 23 22 5の順に参照）

日本民族の創造の課題の本質は日本民族の健康平和学と言語規範が古代ギリシャ哲学やドイツ古典哲学をどのように超えていけるか？にあると筆者は考えている。なお、JOMON あかでみいの健康平和学については、JOMON あかでみいサイトの「理念集」の画面を参照されたい。

JOMON あかでみいサイトはさりげなく新しい時代の画面と印刷などの可能性と現実性を追求していく。2035年（サイト開始から30年後）をみつめつつ。当面は画面のフォント・レイアウト・カラーコーディネートなどがプレハブ小屋のようにみすばらしいがそれが美しくなる時はすでにコンテンツが十分に発達している時であろう。

〔文献〕以下のお互いに異質な分野の文献を同時に参照しそれらの矛盾を解決していく思索の努力こそが人間と通信における創造性の源泉であると思われる。（筆者もこれらの文献のすべてを深く理解できているわけではなくこれからが楽しみである。）

- 1 ウィーナー 『サイバネティクス - 動物と機械における制御と通信 - 第2版』(池原・彌永・室賀・戸田共訳 / 岩波書店 1962年)
- 2 N.ウィーナー 『人間機械論人間の人的な利用 第2版』(鎮目・池原共訳 / みすず書房 1979年)
- 3 森下 巖 『現代統計数理シリーズ9 サイバネティクス』(森北出版 1977年)
- 4 甘利俊一 『バイオコンピュータ NEW SCIENCE AGE17』(岩波書店 1986年)
- 5 山崎弘郎・橋本 康・鳥居 徹 『インテリジェント農業 - 自動化・知能化のすすめ - 』(工業調査会 1996年)
- 6 杉田元宜 『バイオニクスと生命論』(学会出版センター 1979年)
- 7 杉田元宜 『工学的発想のすすめ』(大月書店国民文庫 1977年)
- 8 清水 博 『生命知としての場の論理柳生新陰流に見る共創の理』(中公新書 1996年)
- 9 時実利彦 『脳の話』(岩波新書 1962年)
- 10 梅田望夫 『ウェブ進化論 - 本当の大変化はこれから始まる』(ちくま新書 2006年)
- 11 梅田望夫・平野啓一郎 『ウェブ人間論』(新潮新書 2006年)
- 12 創藝舎 『グーグル完全活用本』(三笠書房・知的生きかた文庫 2006年)
- 13 R.Dornfest,P.Bausch,T.Calishain 『Google Hacks 第3版 - プロが使うテクニック&ツール 100選』(山名早人監訳 / オライリー・ジャパン 2007年)
- 14 サティール・ポッター、アイボーイ 『Web3.0 への会議』(ゴマブックス 2007年)
- 15 渡辺力蔵 『日本的創造性創造性のマクロ理論』(近代文芸社 2000年)
- 16 三浦つとむ 『マルクス主義と情報化社会』(三一書房 1971年)
- 17 三浦つとむ 『言語学と記号学』(勁草書房 1977年)
- 18 三浦つとむ 『弁証法はどういう科学か』(講談社現代新書 1968年)
- 19 山田 学 『学問の転換未来の世界を日本から』(民衆図書刊行会 1994年)

[www.jomaca.join-us.jp](http://www.jomaca.join-us.jp) 参照

- 20 庄司和晃 『認識の三段階連関理論』(季節社 1992年増補版)
- 21 萩野貞樹 『ほんとうの敬語』(PHP 新書 2005年)
- 22 渥美俊一 『商業経営の精神と技術』(商業界 1988年)
- 23 神崎宣武 『日本人は何を食べてきたか』(大月書店 1987年)
- 24 寺沢 薫 『日本の歴史 第02巻王権誕生』(講談社 2000年)
- 25 斎藤守弘 『神々の発見超歴史学ノート』(講談社文庫 1997年)

本稿は短い文章であるが、筆者が 1981年に東京大学工学部計数工学科計測コースを中退してから26年後の、筆者なりの回答である。